

## 中学生の学校適応感に関する研究

### A STUDY OF THE SCHOOL ADJUSTMENT OF JUNIOR HIGH SCHOOL STUDENTS

大 前 泰 彦 (湯浅中学校)

Yasuhiko OHMAE (Yuasa Junior High School)

本研究の目的は、中学生の学校適応感に関する因果モデルを構成することである。「教師関係安定感」「友人関係安定感」「自己有用感」「学校生活充実感」を構成概念として共分散構造分析を行った結果、教師関係および友人関係は、自己有用感や学校生活充実感の予測変数であることがわかった。また、自己有用感は学校生活充実感に影響を及ぼすことがわかった。中学生が学校生活を充実したものと認知するためには、教師との良好な関係が必要であることを再確認させる結果となった。

キー・ワード：中学生，学校適応感，教師—生徒関係

### 問題と目的

不登校生徒数は年々増加の一途にあり、毎年記録を更新している。学校現場では、予防や対処の取り組みが日々なされているにもかかわらず、減少していない。不登校問題は複雑であり、学校要因のみで説明することはできない。しかし、生徒が長時間生活する環境としての学校において、生徒がよりよく適応できる状態であることが不登校を予防したり、再登校への取り組みをすすめていく上で極めて重要であると思われる。

適応感とは、個人が環境の中でうまく生活している感覚であろう。高橋(1990)は、学校適応とは、学校の集団生活ないしは諸活動に対する帰属度、満足度、依存度などを要因とする児童・生徒の個人的、主観的状态とする定義が妥当だとしている。すなわち集団生活あるいは集団活動に帰属し、満足感を得るためには、肯定的な自己概念を持ち、自分が集団にとって有用であるという認知が必要であると考えられる。

松山(1981)は、SMT (school morale test: 学級適応診断検査)におけるモラル得点の高い生徒は低い生徒と比較して、肯定的な自己概念をもち、級友や担任教師の自己に対する評価も肯定的であると認知しており、社会測定的地位も高く、学業成績もすぐれている、という結果を得ている。さらに、松山ら(1981)は、小学5年生から6年生にわたる自己概念の変動が学校への態度に及ぼす効果について分析している。その結果、肯定的な自己概念が学級・学校への適応をもたらしていると報告している。蘭(1992)は、肯定的な自己概念、自己評価や自尊感情の形成は、社会的適応行動や建設的な行動を促進しやすいとし、そのような自尊感情を高めるには、学級内の重要な役割を担当することによる子どもたちの自己概念の高揚や成功的役割遂行から生まれる自信と友達からの受容・容認による安定感の獲得が必要だとしている。

以上から、学校適応感の規定要因としては、自分がみんなの役に立っているという感じ(社会的役割としての自己概念)、すなわち自己有用感が考えられるのではないだろうか(仮説1)。

では、社会的役割としての自己概念、自己有用感はどのようにして得られるのであろうか。天根(1990)は、人は自己評価を高めようとする欲求をもつものであり、その欲求は主として他者からの承認によって満たされると述べ、自己評価と社会的承認欲求との関係を明らかにしている。他者からの肯定的評価が自己有用感を高めていくと考えられるのである。すなわち、自己有用感是对人関係の質が重要な役割を果たすのではないだろうか。

学校における対人関係は、主に教師関係と友人関係である。古城(1988)は、教師期待効果と生徒の認知および自己概念との関係についての報告で、教師の期待に沿った行動が自己概念など彼らの内的過程に少なからず影響を及ぼす、と述べている。また、狩野・田崎(1990)は、教師が生徒の欲求を満たし、かつ生徒の側も教師の欲求を満たす傾向の強いクラスは、そのような傾向が少ないクラスより、生徒の学校への適応が良く、スクール・モラルが高い、と報告している。つまり教師関係の認知が自己有用感および学校適応感に影響を与えるのではないかと考えられるのである(仮説2)。

また、当然ながら、友人関係の認知も自己有用感に影響を与えるのではないかと考えられる(仮説3)。学校適応は、まず所属する学級への適応から始まる。新しい学級での生活が始まると、次第に人的結合を伴う人間関係が成立し、公式的・強制的学級集団も心理集団として構造化されていく。田中(1984)のいうように、学級は子ども達にとって1つの出会いの場であろう。学級の中に友人がいなければ、親和欲求や承認欲求などの人間関係にかかわる欲求は充足されない。好きな友人を1人でももてることが学級集団への適応の基本条件である(高橋:1990)。加藤(1984)も、思春期の子ども達が生きがいを感じるのは、友人といっしょにいるときや目標に向かって努力しているときが多い、と指摘している。

以上より、学校生活に適応し満足し、日々充実しているという認知は、自己有用感に規定され、自己有用感、教師関係および友人関係の認知に規定される、と考えられる。ところが、従来の研究では、これらの因果関係を求めたものは少ない。学校現場での実践にとっては、因果モデルの必要性は高い。したがって、本研究はこれの構築目的とする。まず、FIGURE 1 に示したモデルが考えられよう。しかし、これに加えて、友人関係と教師関係の間の相関もあり得ると仮定したモデルも可能であろう。これをFIGURE 2 に示した。また、友人関係や教師関係の認知は、自己有用感に貢献するとともに、両方とも直接、学校適応感に影響を与えるということも考えられる(仮説4)。仮説1 2 3 4のすべてを満たすモデル3も可能である。本研究は、学校適応感を学校生活が充実しているという認知とし、これを規定する構成概念として、「教師関係の認知」、「友人関係の認知」および「自己有用感」を想定し、それらの因果関係を求めるものである。

## 方 法

和歌山県内の3中学校1・2・3年生計680名(男子350, 女子330)名を分析の対象とした。学校適応感、古川ら(1993)の学校生きがい感測定尺度を用いた。この尺度は、24項目あり、「教師関係安定感」「友人関係安定感」「自己有用感」「学校生活充実感」の4つの下位尺度より構成されている。生徒が自分の日頃の学校生活を振り返って回答した。4件法で行い、「よくあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「全くあてはまらない」を1点として得点化した。ただし、逆転項目には、それぞれ、1・2・3・4点を与えた。

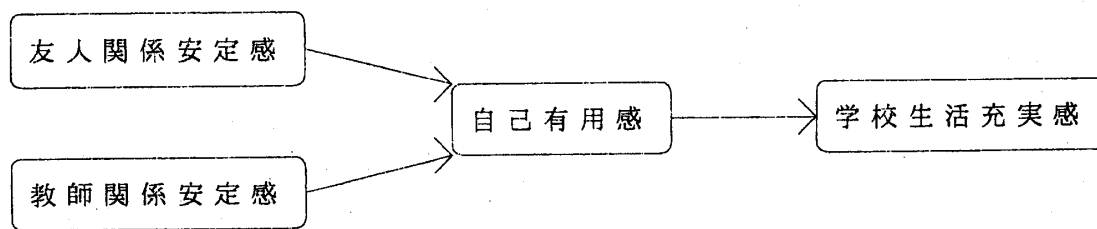


FIGURE 1 モデル1

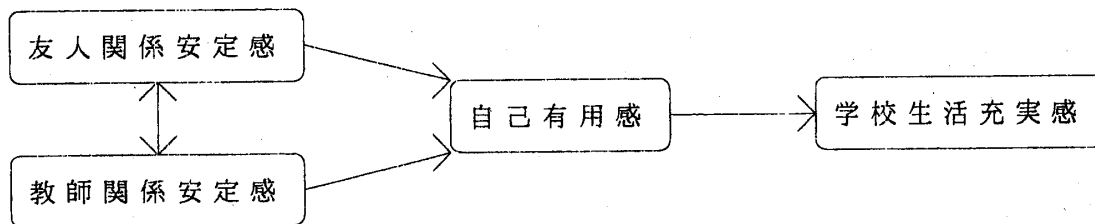


FIGURE 2 モデル2

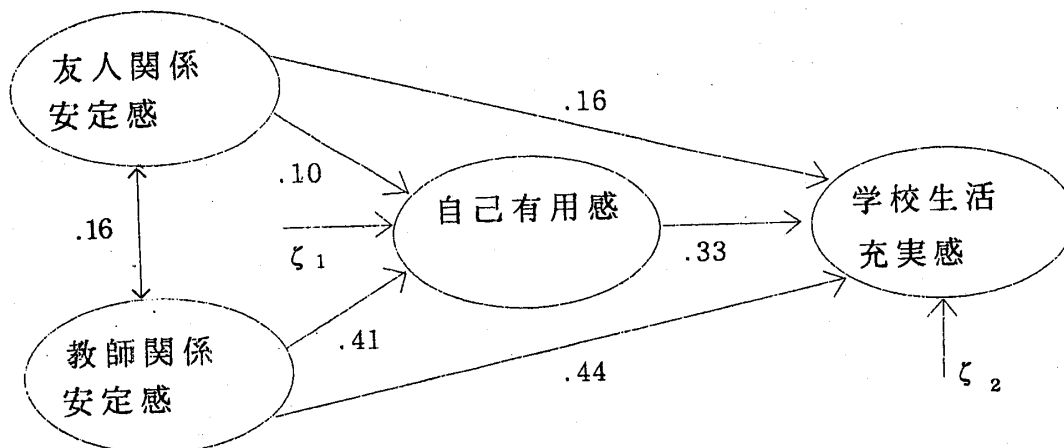


FIGURE 3 モデル3

TABLE 1 各モデルの全体的評価

	$\chi^2$	df	prob	GFI	AGFI	AIC
モデル1	807.18	248	$p < .0001$	.8991	.8780	311.18
モデル2	816.77	249	$p < .0001$	.8978	.8768	318.77
モデル3	717.87	246	$p < .0001$	.9090	.8891	224.87

TABLE 2 モデル3における構成概念への影響指数(標準化解)

観測変数	項 目	標準化解	誤差変数
<友人関係安定感>			
x01	友達の中にいても「ひとりぼっちだなあ」と思いますか。	.534	.846
x05	「クラスの人からいじめられている」と思いますか。	.589	.808
x09	「友達は少ない方だ」と思いますか。	.571	.821
x13	「陰で私の悪口を言っている人がいる」と思いますか。	.589	.801
x17	クラスのためになると思っていたことに対して、友達から文句を言われることが多いですか。	.440	.898
x21	「クラスの中には私の失敗を喜ぶ人がいる」と思いますか。	.504	.864
<教師関係安定感>			
x03	「先生は、私の気持ちを分かってくれている」と思いますか。	.730	.683
x07	「先生は、私が困っていたり悩んでいたらいっしょになって考えてくれる」と思いますか。	.761	.650
x11	「先生はみんなと同じように接してくれている」と思いますか。	.650	.760
x15	「先生は私がまちがったことをしたとき、きちんとわけを聞いてくれる」と思いますか。	.702	.712
x19	先生といっしょに勉強や生活をしていると、とても安心しますか。	.677	.736
x23	先生にしかられても「私のことを考えてしかっているんだ」と思いますか。	.628	.778
<学校生活充実感>			
x02	学校生活の中で「がんばってよかったなあ」と感じることはありませんか。	.563	.826
x06	毎日「やる気」を持って生活していると思いますか。	.670	.742
x10	「今日も楽しい学校生活を送ることができたなあ」という気持ちで学校から帰ることが多いですか。	.578	.816
x14	系の活動などをやりとげたときに、「がんばってよかったなあ」と思いますか。	.678	.774
x18	一日の学校生活の中で、何か夢中になってすることがありますか。	.444	.896
x22	自分で立てた目標をやりぬくためには、失敗にくじけないで最後までねばり強くやりぬくことができると思いますか。	.446	.895
<自己有用感>			
x04	クラスのみんなから「これができるのは君しかいない」と言われることが多いですか。	.549	.836
x08	先生から「みんなの中心となってクラスをまとめてほしい」とたのまれることが多いですか。	.632	.775
x12	先生から「役に立つひとだ」と思われていますか。	.708	
x16	友達から「役に立つ人だ」と思われていますか。	.611	.792
x20	学級の委員や班の班長などによく選ばれる方ですか。	.602	
x24	先生から「手伝いをしてくれないか」とよくたのまれますか。	.520	.854

## 結 果

「友人関係安定感」「教師関係安定感」「自己有用感」「学校生活充実感」を構成概念として、共分散構造モデル作成を試みた。分析は汎用統計パッケージSASのCALISプロシジャを用いた。仮説より、モデル1 (FIGURE 1)、モデル2 (FIGURE 2)、モデル3 (FIGURE 3) の3種類考えられ、それぞれについて分析を行った。適合度指標 (GFI) 等のモデル評価に関する統計量をTABLE 1に示す。因果モデルの適合性および仮説の多面性からみて、モデル3を採用した (FIGURE 3)。このモデルのGFI (Goodness of Fit Index)は、.909、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index)は .889 であり、標本共分散行列の説明に問題はないと判断した。単方向の矢印の数値は、標準化された因果係数を、双方向の矢印の数値は相関係数を表す。測定方程式および構造方程式における因果係数は、いずれも有意であった。構造方程式の誤差変数は $\epsilon$ で示した。測定方程式の誤差変数は、TABLE 2に示した。

「教師関係安定感」は「自己有用感」を媒介し「学校生活充実感」へ、一方「友人関係安定感」も「自己有用感」を媒介し「学校生活充実感」を規定する2方向からのパスとなっているが、同時に「教師関係安定感」が「自己有用感」を媒介せずに、直接「学校生活充実感」を規定するパス、および「友人関係安定感」が「自己有用感」を媒介せずに、直接「学校生活充実感」を規定しているパスも求めている。「教師関係安定感」が「自己有用感」を規定する因果係数は .41 であり、教師から理解され教師が愛情をもって接してくれているという認知は、自分の役割活動が役にたっているという認知の予測変数となっていた。また、「教師関係安定感」が「学校生活充実感」を直接規定する因果係数は .44 であり、教師との安定した関係の認知が、自分の持っている可能性を十分に引き出し、「やった!」「やり遂げた」「がんばってよかった!」という実感を得るための予測変数となっていた。「自己有用感」から「学校生活充実感」への因果係数は、.33 であり、学校生活によりよく適応するためには一人ひとりにふさわしい役割活動が必要であり、自分がみんなの役にたっていると感じさせることが大切であることを示している。「友人関係安定感」から「自己有用感」および「学校生活充実感」への因果係数はそれぞれ .10と .16 であった。「教師関係安定感」と「友人関係安定感」の相関値は .16 であった。また、内生的潜在変数の決定係数( $R^2$ )は、「学校生活充実感」で .486、「自己有用感」で .189 であった。観測変数  $x_{01} \sim x_{24}$  から構成概念への影響指数は、TABLE 2に示した。

## 考 察

本研究の目的は、中学生の学校適応感についての因果モデルを構成することであった。学校生活が充実しているという認知には、社会的役割としての自己有用感および教師関係、友人関係が影響を及ぼしているということを共分散構造分析を用いて検討した。その結果、「教師関係安定感」が「自己有用感」に影響を与えており、「自己有用感」は「学校生活充実感」の予測変数であることがわかった。また、「教師関係安定感」は直接「学校生活充実感」に影響を及ぼすことがわかった。「友人関係安定感」も同様に「自己有用感」や「学校生活充実感」に影響を与えることがわかった。測定方程式においても構造方程式においても因果係数がすべて有意であったことから、それらの関係性は、すべて支持されたといえる。また、モデル全体の適合性も十分な値を示し、構成されたモデルは全体として説明力が高いといえる。

本研究の結果より、改めて、教師関係および友人関係の重要性が確認された。先行研究の成果をふまえながら、これらについて考察していく。

## 1. 教師関係が与える影響

学校での生活は、まず、学級の人間関係よりスタートする。4月になって新しい年度当初、子ども達の最大の関心事は、誰と同じ学級になっているか、および誰が担任かである。学級がスタートしたばかりでは、人間関係の探索期であり、まだ構造化されていないが、次第に親しい関係ができていく。子ども達は教師との心理的距離を探りながら、教師に対して自分なりの内的イメージをつくりあげていくのである。教師に対して陽性感情をもったり、モデリングの対象であると認知したりすれば、尊敬と愛着をもち、教師関係は安定したものとなるであろう。そのような安定感は、すなわち、学級の指導者＝教師に認められ信頼されていると認知することであるから、当然学級での生活は、楽しく充実したものになるであろう。生徒は教師に認められたと感じれば、自己評価も高くなり、学校生活が充実していると感じるのであるが、逆の視点からみれば、学校不適応の場合は、教師との関係は悪く、教師をストレッサーと感じる場合もあるということである。

一旦悪くなった教師－子ども関係は、修復することは難しい。野田・萩(1989)のいう「復讐の段階」にまで至れば、もはや2者の間では修復は不可能であるとされる。したがって、不適切な行動パターンの、第1段階－賞賛を求める(いい子でいてほめられよう)、第2段階－注目を引く(なんとしてでもめだとう)、までの間に関係を修復し、第3段階－権力闘争(勝とう、少なくとも負けないでいよう)からは、第3者の援助を得て回復をはからねばならないだろう。この場合、学校におけるカウンセリング活動がどう機能できるかが問われるであろう。

## 2. 友人関係が与える影響

友人関係の安定が、学校生活にとって重要な意味をもつことは、改めて指摘する必要があるほど、至極当然のことと思われる。とくに思春期における「友人」の果たす役割は、多くの先行研究で明らかにされている。仲間からの脱落は、すでに親子関係から心理的に離脱している思春期の子ども達にとって社会的な孤立を意味するのである。それゆえ、友人関係は、児童期とは異なった重要な意味をもつのである。

上田(1969)は、友人選択の主要な基準が、発達にともなって、外面的・物理的な要因から内面的要因へと移行する、と報告している。そしてこの内面的要因による友人選択は、交友関係の持続性・安定性をもたらすと考えられるという。

思春期は、身体的発達とともに精神的にも変化が生じ、不安定になりやすい。そこで、自分の不安な心理的状況に対応してほしいという内的欲求が生じるのであり、不安をしずめるためには、寄り添える持続性のある「友」が必要となるのである。児童期の「仲間」ではなく、「親友」を求めるようになるのは、このためであろう。友人関係において安定感が得られることは、生活の主たる場であり、友人となり得る対象が最も豊富な学校において充実感を生むことになるのでであろう。

思春期における交友関係は、出会いと選択、そして「山あらしジレンマ」の繰り返しである。友人関係の中で他者評価の目を育て、それをやがて自分自身に向けることができるようになることが大切であり、安定感が得られれば学校適応にも好ましい影響を与えるのではないだろうか。ただ、今回の調査結果では、友人関係も大切であるが、それ以上に教師との関係の重要性を示した結果となった。

### 3. 今後の課題—生徒が「教師関係安定感」を得るために

本研究は、生徒の認知する学校適応感について調査・分析を行った。中学生にとって良好な教師関係は、学校適応の規定要因であることがわかった。

教師であれば当然子どもとの間に信頼関係を築く必要がある。そう考えていない教師はいったい何人いるであろうか。しかし、小学校の「学級崩壊」、中学校の「新しい荒れ」等、昨今の状況はたいへん厳しい。信頼関係が危機に陥りつつあるのである。

児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議(1998)の報告では、学校だけでは対応できない新たな問題が増えてきていることを十分に認識する必要がある、と述べている。

そして、教師側の問題点も指摘されている。児童生徒の起こした行為を問題行動だと認めたがらない傾向やすべて自分の指導方法で解決できるという思いこみがあることも否定できない。「学級王国」を形成している場合もある。また、責任転嫁論者が多いことも事実である。これは、問題行動が発生したとき、自分の学級であればなるべくオープンにならないようにし、もし表に出してしまえば問題をあまりたいしたことのないように世論形成をしたりする傾向である。仲間の教師の学級ならば、その原因帰属を児童生徒や家庭に、そうでない教師の場合は、その教師の指導性に責任転嫁する例もある。しかし、「まともな」教師は、子どもとの関係に日々気を配り、信頼関係を築くことを力を注いでいる。このような努力が現在一定の効果をあげているがゆえに、学校崩壊にまで至っていないといえよう。ただし、将来にわたっての楽観はできない。不登校、校内暴力等は急増してきているからである。

今後は関係機関との連携が重要になってこよう。しかし、児童生徒が学校を出て、別の機関に所属しない限り、本来所属するフォーマルな集団は学級・学校である。学校での適応を最優先した取り組みが必要である。そのためには、教師と子どもとの関係の修復、改善が大切である。

ところが、教育相談活動やスクールカウンセラー制度等の導入の必要性は叫ばれてはいるものの教師が子どもと信頼関係を深めることを援助する活動は、どの程度取り組まれているのだろうか。教師に努力をせよ、という論調が殆どではないだろうか。「思春期の難しさのことを考えると教師の方にもそれに見合うだけの努力を払わねばならない」等の指摘は多いし、まさにその通りであろう。しかし、現在、教師の方が生徒との人間関係で心理的ストレスが溜まり、辞職者や休職者が増えてきているのも実状である。

石隈(1996)は、学校カウンセリングでの介入の焦点は、子どもと環境(学校・学級・家庭)との関係であると指摘しつつも、教師と子どもとの関係を援助する相談活動については具体的にふれていない。大野(1997)も数多くの文献から学校教育相談のあり方を考究しているが、担任教師と子どもとの信頼関係を修復、改善、深化していく方針等は明記していない。いまだ、学校教育相談上の問題点は、カウンセリングマインドをもつことや「厳しさ」と「甘やかし」の葛藤の域を出ていない観がする。今村・上地(1996)のような、「スクールカウンセラーは、この制度が学校に定着するまでは黒子になり、手柄は教師へ」という観点は極めて少ないのである。

中学生の学校適応において、教師との関係が重要な意味をもつことは、子ども自身が認知している。したがって、学校における諸問題の解決や援助は、教師と子どもとの信頼関係づくりを最優先すべきである。今回の調査結果はそれを証明しているのである。

## 〔引用文献〕

- 天根哲治 1990 教師の魅力(小川一夫編 学校教育の社会心理学) 北大路書房 73-84.
- 蘭千壽 1992 セルフ・エスティームの変容と教育指導(遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編 セルフ・エスティームの心理学) ナカニシヤ出版 200-226.
- 今村祐・上地安昭 1996 日本のスクールカウンセラーの導入に関する課題と展望—米国のスクールカウンセラー制度と比較して— 生徒指導研究, 7, 18-27. 兵庫教育大学生徒指導講座
- 石隈利紀 1996 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, 29, 226-239.
- 児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議 1998 学校の「抱え込み」から開かれた「連携」へ—問題行動への新たな対応—児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議
- 狩野素朗・田崎敏昭 1990 学級集団理解の社会心理学 ナカニシヤ出版
- 加藤隆勝 1984 人間関係と生きがい感(加藤隆勝編 思春期の人間関係) 大日本図書 151-173.
- 古川雅文・大江幸銅・内藤勇次・浅川潔司 1993 学校における児童の生きがい感尺度の構成 兵庫教育大学研究紀要, 13, 103-113.
- 古城和敬 1988 教師の期待による影響(浜名外喜夫編 教師が変われば子どもも変わる) 北大路書房 37-90.
- 松山安雄 1981 学級集団力学 (河合伊六・池田貞美・祐宗省三編 現代教育心理学の展開) 川島書店 199-220.
- 松山安雄・秋葉英則・北村絹江 1981 児童の自己概念と学校に対する態度について 大阪教育大学紀要(第VI部門), 30, 115-126.
- 野田俊作・荻昌子 1989 クラスはよみがえる 創元社
- 大野精一 1997 学校教育相談とは何か カウンセリング研究, 30, 68-179.
- 高橋超 1990 学級・学校への適応(小川一夫編 学校教育の社会心理学) 北大路書房 125-140.
- 田中祐次 1984 交友関係の変貌(加藤隆勝編 思春期の人間関係) 大日本図書 105-150.
- 上田敏見 1969 学級における社会的受容に関する発達心理学的研究(Ⅳ)——対人結合要因に関する発達の分析 奈良教育大学紀要, 17, 227-242.